

JAMの主張

至誠にして動かざるものは、 未だこれ有らざるなり

【機関紙JAM・ 2021年5月25日発行 第268号】

2021年5月28日開催の第38回中央委員会において、第26回参議院議員選挙の比例代表候補予定者として、村田きょうこ氏の推薦を決定した。

われわれと基幹労連は「3年ごとをタームとした6年パッケージ」で政策協定に基づく協力関係を築き、前回の田中ひさや選挙では「JAM出身・基幹労連代表」とし組織内候補者と同様の力強い支援を頂いた。今度はJAMが全力で恩返しをする番である。

来夏の決戦に向けて、村田きょうこ氏を「基幹労連出身・JAM代表」と位置づけ、JAM 39万人の総力を結集し、不退転の決意で議席奪還を実現しなければならない。

総行動を展開するにあたって、以前に次のように寄稿したのを思い出した。

「我々は『伝える』という作業で満足しているのではないだろうか？『自分の思いを間違いなく相手に届けよう』という意思をもった行動が『伝える』である。一方、相手が『分かった』と理解や納得して、何らかの行動を起こすまでが『伝わる』である。『伝える』こと自体は、ゴールでなくプロセスに過ぎない。『伝えた』という事実は『伝わった』という保証にはならない」と。

長州藩士で明治維新の精神的指導者・倒幕論者として知られる吉田松陰は、次のような教えを残している。

「至誠にして動かざるものは、未だこれ有らざるなり」という言葉である。

こちらがこの上もない誠の心を尽くしても、感動しなかったという人に未だ会ったためしがない。誠を尽くせば、動かすことが出来ないものはないということである。動かざるは誠が尽くせていないということである。

続くコロナ禍において、以前通りの対話型の取り組みには困難な部分があるとは思う。

しかし、われわれは知恵を出し合い工夫を凝らし、誠心誠意で総行動を展開し、結束することで最大の力を発揮し、必ずや目的を達成する。

われわれにはその力があるはずだ。

副書記長 川野英樹